黒毛和種繁殖用雌牛における蹄深部感染症の１症例

愛知県　　（有）知多大動物病院

○山本幸夫（やまもとゆきお）　伊澤祐子　西田裕美　工藤秀男

【はじめに】

本症例は乳牛に比べて蹄病の発生が少ない黒毛和種繁殖用雌牛が蹄深部感染症に罹患して発症した末節骨炎と繋部から球節にかけてのフレグモーネが良好に治癒したので報告する。

【症例・臨床経過】

本症例は４産目の黒毛和種繁殖用雌牛であり、分娩後 53 日となる第１病日、左後肢内蹄蹄尖軸側の白帯病により強い跛行を呈して削蹄による蹄処置を行なったが跛行が改善せず、第 6 病日に繋部から球節にかけて著しく腫脹したため外蹄にブロックを装着して包帯し、抗生物質を 3 日間全身投与した。第 13 病日には病変部の不整肉芽に瘻管が形成されて導乳管で蹄骨が触知可能となり、さらに軸側から近位につながる瘻管も形成されており、第 16 病日、第 24 病日にかけて、剥離した角質と不整肉芽で覆われた部分を切除して蹄骨炎と瘻管を露出し、蹄骨表面を鋭匙で掻爬して生食 500ml で洗浄し、シソジンガーゼを充填、包帯してオムツで被覆保護した。その間、抗生物質を５日間全身投与した。第 29 病日には繋部の腫脹はほぼ消失して副蹄周囲には波動感を触知したが、病変部には悪化はみられず負重と跛行は著しく改善した。第 37 病日、第 44 病日、第 51 病日にかけて外側副蹄遠位と球節外側の近位で膿瘍が自潰し、膿瘍内を水道水で洗浄後に生食で洗浄してイソジンガーゼを充填して包帯し、自潰膿瘍内腔縮小後にも排膿がみられたため生食で洗浄後にナイロン糸 5 本をドレインとして挿入して生理用ナプキンをあてて包帯した。蹄尖の病変部はハイドロコロイド絆創膏で被覆して包帯した。第 64 病日には蹄尖部は角質化し、膿瘍跡は完全に閉鎖して急速に収縮し、腫脹は消失した。ブロックを除去して終診とし、分娩後 6 か月半で人工授精により受胎した。

【考察】

本症例は後肢内蹄蹄尖軸側の白帯病から蹄骨に感染が及び、さらに内蹄軸側から近位に向かって感染が上行して繋部から球節にかけてフレグモーネとなったが、患部の状態から原因は蹄尖軸側白帯付近に異物が穿孔した可能性が考えられる。瘻過剰肉芽組織と瘻管が存在し露出した蹄骨が正常肉芽組織で覆われずその蹄骨表面が脆弱であることが骨表面を掻爬すべき目安になると考えられ、掻爬して洗浄することで感染性蹄骨炎患部を除去することは有効と考えられる。自潰した膿瘍の処置は洗浄とイソジンガーゼ充填によるが、内腔が縮小した後は人医療の創傷治療において咬創や刺創などの真皮より深く細い創に適用するナイロン糸ドレインを応用したことで内腔の閉鎖が促進されたと考えられる。また人医療で使用される創傷被覆材であるハイドロコロイド絆創膏を感染が制御された後の蹄尖の病変に適用したことによって急速に上皮化と角質化が促進されたと考えられる。今後はさらに治療期間短縮を検討する必要がある。